

# 「知性」の「無理解」

## —アリストテレスのアナクサゴラス評—

松浦和也

### 1. はじめに

ディオゲネス＝ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』第2巻第6節が報告するように、アナクサゴラスは「知性」(νοῦς)と称されていたことが知られている。だが、この異名に反し、プラトンやアリストテレスからの評価は芳しくない。プラトンは『パイドン』後半で、ソクラテスにアナクサゴラスの言説に落胆したと語らせている (*Phaedo*, 89B)。そして、アリストテレスは『形而上学』第1巻第3章で、アナクサゴラスをエンペドクレスと比較し、前者の業績は後者のそれよりも劣っていると評している (*Met.* A 3, 984a11-13. DK 31A6, 59A43)<sup>1</sup>。

しかし、アリストテレスによるフォアゾクラティカの報告は信憑性が低いとしばしば評される。たとえば、アナクサゴラスが唱えたとされるアルケーを「同質部分的なもの」(ὁμοιομερῆ)とアリストテレスは述べているが(*Met. ibid.*)、この語は現存するアナクサゴラス断片に現れないものであり、それゆえこの語はアリストテレスの造語だと考えられている<sup>2</sup>。また、アリストテレスによるフォアゾクラティカへの批判や評価は彼自身の教説に依存することも知られている。たとえば、『自然学』第1巻第8章 191a24-33で彼はエレア派の運動否定論に反論を加えるが、その反論の要点はアリストテレス自身の哲学的教説である「ある」(ὄν)の多義性にあった。

このようなアリストテレスによる報告の特性は、フォアゾクラティカ研究

において彼の手による報告の資料性を軽視する態度に繋がる。だが、もし、報告者としてのアリストテレスの特性をより鮮明にすることができれば、彼の手による報告をフォアゾクラティカ研究の中でより適切に扱えるかもしれない。本稿は、この期待に応えるための手順の一つとして、『生成消滅論』第1巻第1章で表明されるアナクサゴラス評に着目する。『生成消滅論』におけるフォアゾクラティカたちの運動変化に関する諸見解を紹介する文脈において、アリストテレスはアナクサゴラスに厳しい評価を下す。だが、その評価の理由は、続く議論に明確に描かれてはいない。本稿の目的は、この内実を『生成消滅論』の文脈とアナクサゴラス断片から明らかにし、さらにその内実の妥当性を検討することを通じ、フォアゾクラティカの報告者としてのアリストテレスの特性のひとつを提示することにある。

## 2. 『生成消滅論』第1巻第1章 314a11-20 と DK57B17

アリストテレスの『生成消滅論』第1巻第1章は、始原(ἀρχή)あるいは元素(στοίχαια)と生成消滅に関するフォアゾクラティカの諸見解を紹介し、批判する議論である。同章の大部分を占めるのはエンペドクレス説に対する反論であり、この反論の分量に比すればアナクサゴラスを扱うテキストは短い。ただし、その内容は辛辣である。

ある人々は、端的な生成と呼ばれるものは性質変化(ἀλλοιώσις)であると言い、別の人々は性質変化と生成は異なるものであると言う。つまり、万物はある一つのものであり、万物はその一つのものから生成すると語る人々であれば誰でも必然的に、生成は性質変化であり、主要な生成するものは性質変化すると語る。また、質料を一つより多くのものとみなす人々、たとえばエンペドクレス、アナクサゴラス、レウキッポスであるが、そのような人々であれば誰でも[必然的に]、それら[生成と性質変化は]異なるものと必然的に[語る]。さらにアナクサゴラスは自分が述べることに無理解であるのであるが、次のように語っている。

生成することと消滅すること（ἀπόλλυσθαι）は性質変化と同じだとしている一方で、他の人々同様に、元素を複数あると述べている。つまり、エンペドクレスは元素を4つとし、動かすものを含めて元素のすべてはその数を6つであるとしているが、アナクサゴラスおよびレウキッポスとデモクリトスはその数を無限としている。アナクサゴラスは「同質部分のもの」を元素に据えた。たとえば、骨や肉や髄、その他その部分が同名同義であるものがそれである。（GC. I 1, 314a11-20）

ここでアリストテレスは、アナクサゴラスによる始原と元素の説を紹介するとともに、彼に対し、314a13で「自分が述べることに無理解である」（Ἀναξαγόρας γε τὴν οἰκείαν φωνὴν ἠγγνόησεν）と評している<sup>3</sup>。そして、アナクサゴラス評の直後には「生成することと消滅することは性質変化と同じだとしている」（314a13-15）という発言がある。それゆえ、アナクサゴラスの生成理論において、多元論を採用しながら生成を性質変化と同一視することにアリストテレスは矛盾を見出していると思なす点では解釈の一致がある。

その矛盾の内実を説明するために、しばしばシンプリキオス『自然学註解』に残された断片17との関連が指摘される。

生成と消滅（τὸ ἀπόλλυσθαι）をギリシア人たちは正しく扱っていない。つまり、いかなる事物も生成も消滅もしないが、むしろ「事物は」存在している事物から混合し、分解するからである。そして、「生成する」を「混合する」と、「消滅する」を「分解する」と呼べば、正しい呼び方となろう。（DK59B17）

この断片は、生成は混合（συμμίγεσθαι）であり、消滅は分解（φιακρίνεσθαι）であると述べている。たしかに、アナクサゴラスが生成という運動変化の構造を別の運動変化概念に還元させている証拠としてこの断片17は機能するだろう。しかし、この断片17は『生成消滅論』のアナクサゴラス評を十分

に説明しない<sup>4</sup>。なぜなら、アナクサゴラス評が成立するために必要な立場は、生成とは性質変化である、という立場だからである。この立場と、生成とは混合であるという主張はむしろ対立するだろう。

それゆえ、アナクサゴラス評の意味を確定するには、生成とは性質変化であるという主張を断片あるいは報告から導出せねばならない。ただし、その確定のための池田と Joachim の提案は十分ではない。池田は、断片 17 に言及しつつ、アナクサゴラスが一元論的立場を表明している典拠として、断片 1、4、10、12 や『自然学』第 1 巻第 4 章 187a26-30 を参照し、その中に現れる「すべては一緒であった」(ὁμοῦ πάντα χρήματα ἦν) に着目する<sup>5</sup>。もちろん、『生成消滅論』におけるアリストテレスの見解では、一元論は生成と性質変化を同一視する立場なのだから、一元論的立場の表明はそのまま生成と性質変化を同一視した根拠となりうる。だが、「すべては一緒であった」が一元論の表明である理由は必ずしも判明ではない。むしろ、この語句は多元論を支持する論拠としても成立しうる。なぜなら、「すべて」という表現は、さまざまな物理的対象がひとつの元素であったと同程度以上に、多種の元素が同じところに集まっていたと解することも不可能ではないからである。

また、Joachim の提案も説明不足である。Joachim は同じ資料から、アナクサゴラスの「混合」(σύμμικτος) や「分解」(διάκρισις) に着目する<sup>6</sup>。だが、これらの概念と、生成と性質変化の同一視がどのように関わるかは不明瞭である。なぜなら、「混合」や「分解」は複数の要素を前提とする概念だと思われるからである。

ただし、両者が言及している『自然学』第 1 巻第 4 章は一度検討する価値がある。なぜなら、該当テキストはアナクサゴラスと性質変化を結び付けているように見えるからである。

思うに、アナクサゴラスがそれら [sc. 元素] をこのように無限だと考えたのは、「あらぬものからはなにものも生じない」という自然学者に

共通の見解を真であると把握していたからである。このゆえに、かれらは「すべては一緒であった」と言い、これこれが生成することは性質変化だとし、別の人々は結合と分離だと言う。(Phys. I 4, 187a26-31)

アリストテレスはアナクサゴラスの名と性質変化の語を近い位置で記している。そして、引用中の「すべては一緒であった」はアナクサゴラス断片1に見られる発言である。したがって、「これこれが生成することは性質変化」とした人物もアナクサゴラスだと推察される。

しかし、このような理解は、Brunschwig が指摘するように、直接テキストから導かれるものではない<sup>7</sup>。この文章は、まず「あらぬものからはなにものも生じない」を真だとし、それゆえ元素を無限と考えたのはアナクサゴラスである、という文から始まる。しかし、「『すべては一緒であった』と言い」の述語は λέγουσιν として、3人称複数で書かれている。もちろん、「すべては一緒であった」と発言した一人は、断片1にもあるようにアナクサゴラスである。しかし、λέγουσιν の主語はアナクサゴラスただ一人を指示するとは考え難い。「別の人々」と訳した a31 の οἱ δέ はおそらく a28 の τῶν φυσικῶν を受けている。つまり、この箇所の議論の流れは、自然学者の一部の人間（すなわちアナクサゴラス）は「すべては一緒であった」と言い、一部の人間はこれこれが生成することは性質変化だとし、別の一部の人間は生成を結合とした、というものだろう<sup>8</sup>。

もし、この読みが妥当なものであれば、『自然学』第1巻第4章 187a26-31 はアナクサゴラスが彼の『自然について』の中で、生成とは性質変化のことであると語った証拠としては脆弱だと診断せねばならない。

もちろん、アナクサゴラス評の内実の片翼を断片17は担うだろう。だが、そのもう片翼を説明するには、一元論的発想を匂わせる断片や報告ではなく、まさに「生成は性質変化である」にアナクサゴラスがコミットしたとアリストテレスが判断した断片を提示せねばならない。

### 3. 性質変化とアナクサゴラス

アナクサゴラスの『自然について』を読んだアリストテレスは、その著作に見られる生成理論に自身の運動分類を適用することによって、「生成は性質変化である」を見出したはずである。彼がどの議論に運動分類を適用したのかを探るには、われわれはまずアリストテレスの性質変化  $\alpha\lambda\lambda\omicron\iota\omega\sigma\iota\varsigma$  の概念を把握する必要があるだろう。

アリストテレスの自然哲学体系の中で、生成と性質変化はカテゴリー分類に即して区分される。すなわち、運動変化の前後で実体が変わるものが生成であり、実体を保持しつつも、色や温度、湿度や剛性<sup>9</sup>といったその実体に属する性質が変わるものが性質変化である<sup>10</sup>。ただし、両者、および残りの運動分類である成長増大や移動には共通点がある。そのひとつは、『自然学』第1巻第7章で導入される〈基体・形相・欠如〉の3項による運動変化モデルである<sup>11</sup>。このモデルに基づけば、生成と性質変化は次のように記述される。

生成： 形相 F を欠いた質料 H が形相 F を得る

性質変化： 性質 P を欠いた [質料と形相の] 結合体 F が性質 P を得る

さて、一元論に立脚して元素から別の物体が生成する局面を記述する場合、両者は同一となると『生成消滅論』のアリストテレスは考えている。なぜなら、一元論の場合、単一の元素から別の物体が生成するときに加えられる形相は、その単一の元素とは別の元素に由来するものではないから、その元素に付け加えられる性質と同一視せねばならないからである。他方、多元論に基づけば、生成と性質変化を区別する余地が残る。なぜなら、この立場では単一の元素に別の元素が付け加わることによる生成を可能にするからである。このような理解は『自然学』第1巻第7章 190b1-b10に基づく。該当箇所では彼がいかなるタイプの生成にも基体が必要であると主張するとき、形の変化 ( $\mu\epsilon\tau\alpha\sigma\eta\mu\acute{\alpha}\tau\iota\varsigma$ )、成長増大 ( $\alpha\upsilon\zeta\eta\sigma\iota\varsigma$ )、取り除き ( $\acute{\alpha}\phi\alpha\iota\rho\epsilon\sigma\iota\varsigma$ ) と並んで、接合 ( $\sigma\acute{\upsilon}\nu\theta\epsilon\sigma\iota\varsigma$ ) と性質変化も生成のタイプに加えているからである。

次に確認すべきは、ある生成が性質変化に分類される場合の条件である。その条件を『生成消滅論』の中から確認するために次の一節を引用しよう。

すべてのものがひとつのものから成るとする者は、生成と消滅は性質変化であると必然的に主張する。なぜなら、基体／主語（*ὑποκείμενον*）は同一に留まると主張するからである。そして、そのようなことを質的転化とわれわれは言う。（*GC. I 1, 314b1-4*）

この引用が示すことは、基体／主語が生成の前後で同一であれば、その生成は性質変化である、ということである。つまり、ある生成が性質変化であるための必要条件は基体／主語が生成後にも同一であることである。一元論の場合、元素からの生成はその元素の凝縮や膨張、温度の変化によってもたらされる。その限りにおいて、生成の前後で基体／主語は同一に留まるだろう。他方、多元論が、生成を複数の元素の混合や接合と見なすならば、生成は性質変化に分類されない。なぜなら、元の複数の基体／主語が混合や接合によって単数の基体／主語に変貌するからである。

それゆえ、生成を性質変化と同一視する見解をアナクサゴラスに帰するのであれば、生成の前後で基体／主語が同一であるような記述を見つけるべきだろう。そして、この観点でアナクサゴラス断片を見直すならば、いくつかの候補を見出すことができる。

ひとつの可能性は断片 16 に求めるものである。

これらのものが分離すると、土が凝固してできた。つまり、雲から水が分離し、水からは土が分離する。そして、土からは冷たいものによって石が凝固させられてできる。これらの石は水よりもはるか遠くへ離れていく。（*DK57B16*）

この断片は雲、水、土そして石の生成を説明するものである。この生成の説

明は、Kirk が指摘するように、アナクシメネスの言説から大部分を得ている<sup>12</sup>。その意味では、アナクサゴラスが一元論的な見解を表明した証拠であるとも診断することができるかもしれない。特に注目すべきは、土から石が冷たいものによって凝固するという主張である。この発言はまさに「生成が性質変化である」という主張に他ならない。だが、この断片は『生成消滅論』のアナクサゴラス評を正当化する論拠としては弱く感じられる。なぜなら、『生成消滅論』第1巻第1章は生成の中でも、元素から別の物体が生成する局面を扱うものだからである。

アナクサゴラスの元素とは、すでに引用した『生成消滅論』第1巻第1章314a11-20にも確認できるように、「同質部分的なもの」ὁμοιομερήであるとアリストテレスは分析している。そこで、生成とこの「同質部分的なもの」、おそらくアナクサゴラスは「種子」σπέρμαと名付けている<sup>13</sup>、に関わる資料として、改めて断片10を確認しよう。

アナクサゴラスは、あらゆるものからは何ものも生成しないという古くからの教義に着目し、生成を廃棄し、生成に変わり分離を導入した。つまり、彼はすべてのものは相互に混同しており、成長増大には分離があると言った。同じ種子(γονή)の中にも髪、爪、血管、脈管、腫や骨が含まれているが、微小な部分であるために目に見えない。増大成長をするときは、少しずつ分離する。「というのは」と彼は言う。「どうして髪ではないものから髪が生成しようか。肉ではないものから肉が生成しようか」。彼は物体のみならず、色にもこのことを主張する。すなわち、白の内にも黒が含まれ、黒の内にも白が含まれる。また、同じことを重さにも適用した。重さにも軽さが混合されており、軽さにも重さが混合されていると考えた。(DK59B10)

断片10は髪や爪といった例を挙げ、それらの成長増大を論じている<sup>14</sup>。ただし、この資料の中で真正の断片は「どうして髪ではないものから髪が生成しよう



か。肉ではないものから肉が生成しようか」の部分である。この部分は一種の生成理論の表明である。すなわち、

X は、X 以外のものから生成せず、X から生成する

しかし、この記述はトートロジーではない。断片 10 で報告されているように、X ではない Y の中に X が内在すると彼は主張するからである。つまり、彼の生成理論は

X の生成は X が内在する Y から生成する

というものである。その裏付けとなる資料が断片 4 の次の一節である。

これらのことはそうであるならば、次のように考えられねばならない。数多くの多種多様なものが、混合されたものすべてのものの中にある。そして、すべての事物の種子（σπέρμα）や、多種多様なかたち、色、味もすべてのものの中にある。（DK59B4）

アナクサゴラスはあらゆるものの中にあらゆる生成後のものが内在していると見なしている。つまり、先の定式の Y は Y であると同時に Y 以外のすべての要素も含み、生成後の X も X であると同時に X 以外のすべての要素も含むことになる。

この見解を前にして、おそらくアリストテレスは次のように考えたのであろう。X も Y も、それ自身を内包したあらゆる要素を含むという点では、本質的な区別はない。それゆえ、アナクサゴラスの生成理論においては、生成前後の基体／主語の同一性が保たれる。したがって、アナクサゴラスは「生成は性質変化である」と主張しうる。だが、もし彼がそのような主張しうるならば、断片 17 の「生成は混合である」という記述と矛盾する。

それゆえ、アリストテレスはアナクサゴラスに「自分が述べることに無理解である」と評価したのだと推察しうる。

#### 4. 全称化された報告

アナクサゴラスの「同質部分的なもの」に関する生成理論には、Cornford が明確に指摘したように、不整合が内在していることが了解事項となっている<sup>15</sup>。すなわち、「同質部分的なもの」においては、物体（たとえば金属片）は、全体に相似た部分のみから構成されるみなす一方で、断片6や断片11に見られるように「あらゆるものの中にあらゆるものの部分がある」という説明に従えば、物体には全体と相反する部分も含むと主張しているように思われるからである。この問題に対する Cornford の解決は、前者を現状の物質の説明にするのに対し、後者を宇宙生成の文脈に置くものである。この解決に対する疑念はしばしば提起されてはいるものの、いまだ説得力ある解釈のひとつである。

しかし、アリストテレスはアナクサゴラスの生成理論に問題点を見出したものの、その解決を行ってはいなかった。しかも、アナクサゴラスの生成理論にアリストテレスは悪意を持って報告しているようにすら見える。

『生成消滅論』第1巻第1章を流れる一元論と多元論、および両者における生成に関する区分を確認しよう。一元論者は、彼の立場から見れば、生成を次の形で説明することになる。

a: 生成は性質変化である<sup>16</sup>

この『生成消滅論』の文脈は、始原あるいは元素から別の物体が生成するメカニズムの検証であるから、aは次のように再表現できる。

A: あらゆる生成はある単一の元素の性質変化である

他方、多元論の運動の説明は

b: 生成と性質変化は異なる

を含意するとアリストテレスは考えている。ただし、bには2つの可能性が論理的にはあり得る。

b1: いかなる生成も性質変化ではない

b2: ある生成は性質変化ではないが、ある生成は性質変化である

先と同様に、b1 と b2 は次のように再定式化できる。

B1: いかなる生成も（多くの元素のうち）単一の元素の性質変化ではない

B2: ある生成は（多くの元素のうち）単一の元素の性質変化ではないが、ある生成は単一の元素の性質変化である

多元論者はすべてB1)を支持するとアリストテレスは考えているように見える。というのは、B2)を検討した形跡が『生成消滅論』第1巻第1章にないからである。しかし、そうであるなら、『生成消滅論』のアナクサゴラス評は奇妙さを感じさせるものとなる。

アナクサゴラスの生成理論に（自身の哲学体系というレンズを通してであるが）、不整合を見出したアリストテレスは、フォアゾクラティカの報告者として、統合的な理解を提示することは可能であったはずである<sup>17</sup>。さらに、『分析論前書』において自ら論理学を系統化した彼が、アナクサゴラスの生成理論を論理的に整理し、その含意を明確化することも可能であったはずである。しかし、このような考察を彼は実践していない<sup>18</sup>。

アリストテレスのこの不誠実さが意図的であるかそうでないかは本稿の枠内を超える。だが、その不誠実さがどのような手続きによって行われたのか

を確認することは、われわれが彼のフォアゾクラティカ報告を資料として扱う際の留意事項のひとつになるだろう。

アナクサゴラス評が妥当なもの認めうるのは、アナクサゴラスが次の主張を同時に行っていた場合である。

C あらゆる生成は複数の元素の混合である

D あらゆる生成は（無限の元素のうち）単一の元素の性質変化である

だが、実のところ、C の論拠として機能しそうな断片 17 を、「同質部分的なもの」や「種子」からの生成を扱う資料とみなすべき積極的な理由はないように思われる。また、D が仮に断片 4 や 10 が述べる実際のアナクサゴラスの主張だったとしても、その場合は性質変化として見なしてよい生成は、「同質部分的なもの」の生成すべてであると見なす確実な論拠でもない。それゆえ、アナクサゴラスは B1 ではなく B2 を主張していた余地は十分に残される。

そして、アナクサゴラス評の典拠のひとつが正に断片 17 であるとしたら、アリストテレスは、読者として留意すべき文脈を無視し、断片 17 の「生成」に全称量子を付することで、アナクサゴラスの生成理論を過剰に一般化し、全称化したのである。

## 5. 報告者としてのアリストテレス

もちろん、この変換を彼が実際に行ったか否かは、アナクサゴラスの『自然において』が失われてしまった現代のわれわれが判断できることではない。しかし、フォアゾクラティカの見解を一般化し、全称化する傾向がアリストテレスにあることを示唆する別の例がある。

このような始原の多さや種について同じことをすべての人は述べてはいない。このような哲学の創始者たるタレスは「始原を」水であると述べ

た（それゆえ、大地は水に浮かぶものだと述べた）。この基本的考えに彼がいたったのは、おそらく、あらゆるものの栄養は水気をもつことを観察し、また熱さそのものもそれから生じ、それによって生きingことを観察したからであろう。[他のものが] それから生じるもの、これがすべてのものの始原である。このことゆえに、タレスは先の基本的な考えに至った一方で、すべてのものの種子が湿った本性を持っていることにもよるのでもあろう。水は、水分を持つものにとって、本性的な始原である。(Met. A 3, 983b18-27)

タレスに最初の哲学者の名誉を与えることになったこの有名な一節は、彼が万物の始原を水と定めるための推察を報告している。しかし、この推察は奇妙である。なぜなら、水気を持つ栄養から熱が生じることや、すべての種子が湿った本性を持つ、という論拠から導かれる結論は、水分を持つもの、あるいは生物の始原は水に過ぎないように感じられるからである。これらの論拠からすべてのものの始原は水という全称化された見解を導出することは、論理的に妥当ではない。万物の始原は水である、という主張を導出するには、命題「始原は水である」を全称化する手続きが必要である（もちろん、タレスが実際にそのような推察を行った可能性は否定できない）<sup>19</sup>。

では、もしアリストテレスがアナクサゴラスの生成理論を実際に全称化したとしたら、その意図はいかなるものか。彼の意図を示唆する文言を最後に挙げたい。『気象論』第2巻第7章で彼はアナクサゴラスによる地震の説明を次のように報告すると共に、評価する。

アナクサゴラスは次のように語る。アイテールは本性的に上へと移動するので、大地の下の空洞に入り込むと、大地を動かす。つまり、[大地の] 上部が雨によって詰まることがある。なぜなら、大地全体は均等にスポンジ状だからである。あたかも、地球全体には上部と下部があり、上部でわれわれ住んでいるものがある部分が上側であり、その他の部分が下

側であるようである。この説明に対しては全く浅薄な発言だと言わざるを得ない。〈中略〉。これらに加え、アナクサゴラスは地震と共に生じることがらを何も説明していない。つまり、地震は無差別にいかなる場所でも、いかなる時期にも発生するわけではないからである。(Meteo. II 7. 365a20-365a20ff)<sup>20</sup>

この報告によれば、地震は地面の下に潜り込んだアイテールが上空に出るときに地震が生じるとアナクサゴラスは考えていた。この説明を浅薄(ἀπλῶς)なものとしてアリストテレスは一蹴する。なぜなら、この説明は地震が特定の場所で特定の時期に生じるという事実を説明できないからである。

この報告と評価が示唆することは、アリストテレスにとって、ある事柄に関する成功した説明はその事柄に関するあらゆる、あるいは大部分の、事象を説明できるものである、ということである。『生成消滅論』の文脈に置き換えれば、元素と生成に関する説はあらゆる元素に関する生成消滅を説明できねばならない。それゆえ、彼はフォアゾクラティカの説明を導入するだけでなく、その説明能力の限界を検証する必要があった。その検証のためには、彼はアナクサゴラスの生成理論を一度一般化し、全称化する必要があった、と考えられる。

しかし、その検証のために本来持つべき(そして現代の文献学者は当然持ち合わせていなければならない)、読解対象を可能な限り好意的に読むという姿勢をアリストテレスはやはり持ち合わせていなかったと診断せざるを得ない。ただし、ある特定の人物の主張を分節し、時には全称化すらして、その主張を過度に単純化したり、適用範囲を超えて応用したりする誘惑に、われわれはどこまで耐えうるだろうか。もちろん、ある主張の単純化や応用が、実りある新たな知見を生む可能性はあるだろう。ただし、その単純化や応用は、もともとの主張に対する無理解を広め、かえってわれわれの知的行為を縛ってしまう危険性も同時に孕んでいるように思われる。

※ 本稿は、JSPS 科研費 JP26770003、JP26284002、JP17H02257 の助成を受けたものです。

### 本文注釈

1. 該当箇所のギリシア語テキストは *Αναξαγόρας δὲ ὁ Κλαζομένιος τῇ μὲν ἡλικίᾳ πρότερος ὢν τούτου (sc. Empedocles) , τοῖς δ' ἔργοις ὕστερος ἀπείρους εἶναι φησὶ τὰς ἀρχάς.* であるが、下線部を付した *ὕστερος* には Bonitz, 805-807 が指摘するように2通りの理解があり得る。第一の理解は、この語を「後の年代」とみなし、アナクサゴラスはエンペドクレスよりも後に学説を書いたとみなすものである (Cheniss, 219, n5)。第二の理解は、この語を「劣った」とみなし、アナクサゴラスはエンペドクレスよりも劣った学説を公表した、とみなすものである (Ross, 132)。O' Brien はこの問題を学説史的観点およびギリシア語 *ὕστερος* の言語的観点から考察し、後者が正当であると判断した (O' Brien, 97-102)。この理解に本稿は従う。

2. Kirk, 376-377. Graham, 271. Reesor, 31.

3. Joachim, 67 や Williams, 1 等に即し、*τὴν οἰκείαν φωνὴν* を「彼自身の発言」と解した。しかし、この語は別の理解もあり得る。たとえば、Brunschwig, 44, n 47 は、アフロディシアスのアレクサンドロスの理解に従い、「適切な名称」と解する。このとき 314a13 の意味は、アナクサゴラスは「性質変化」に与えるべき適切な言葉が見当たらなかった、と訳する。しかし、この場合においてもアリストテレスがアナクサゴラス説に矛盾を見ていたという理解は変わらないだろう。

4. Cf. Brunschwig, 44-45.

5. 池田, 7。この理解は Joachim 解釈の紹介という形式をとっているが、参照先の Joachim はこのような解釈を提示していない。

6. Joachim, 67.

7. Brunschwig, 45-46.

8. この報告は、自然哲学者の中で次の前提が共有されていたことを示唆する。すなわち、一元論のもとでは生成は性質変化の一種としてのみ把握され、多元論のもとでは生成は結合としてのみ把握される、という前提である。ただし、アリス

トテレスはこのような前提を共有していないかもしれない。なぜなら、彼の自然哲学は、四元素説を採用し、かつ元素の生成を認めるが、その生成は元素が性質を獲得するという形で描写されるからである。たとえば、水元素から空気元素が生成するときは、その水元素は「冷」を失い、「熱」を獲得したことになる。もし、この「熱」を獲得するプロセスが性質変化とみなされるのであれば、先の前提を彼は共有していないことになるだろう。

9. *GC*. I 1, 314b18-20.

10. *Phys.* III 1, 201a11-15, V 1, 225b5-9 等。

11. *Phys.* I 7. 191a12-14.

12. Kirk, 372.

13. Kirk, 376-377.

14. アエティオスの『学説誌』からの報告である DK59A46 は、栄養摂取の例を挙げて、身体部分として毛髪や骨の成長を用いることで、食べ物の中にそのような毛髪や骨が含まれていることを導出する。

15. Cornford, 14.

16. *GC*. I 1, 314a8-11, b2-3.

17. Taylor, 405 は次のような厳しい診断を下している。「彼 (ie. アリストテレス) は他者の意見がそれ自体で何を語るべきかを公正に見ることに一度も成功していない」。

18. もちろん、Cherniss, 347 が見出したように、アリストテレスはフォアゾクラテイクの見解を自身の目的に合わせて変更することが可能であったと捉えることは可能である

19. 『自然学』第4巻第7章における空虚の存在を肯定する議論に対する扱いも同様に全称化を施している。

20. 引用の一部は DK59A89。

#### 【参考文献】

Bonitz, H. 1870. *Index Aristotelicus*. Berlin.



- Brunschwig, J. 2004. 'On *Generation and Corruption* I. I: A False Start?' in Hass, F., Mansfeld, J. (eds) . *Aristotle: On Generation and Corruption Book I (Symposium Aristotelicum)* , 2004. Oxford University Press.
- Cherniss, H. F. 1935. *Aristotle's Criticism of Presocratic Philosophy*, Octagon Books.
- Cornford, F. M. 1930. 'Anaxagoras' Theory of Matter - I.' *The Classical Quarterly*, Vol. 24, No.1, 14-35.
- Dorandi T. (ed) . 2013. *Diogenes Laertius: Lives of Eminent Philosophers*. Cambridge University Press.
- Graham, D. W. 2010. *The Texts of Early Greek Philosophy: The Complete Fragments and Selected Testimonies of the Major Presocratics, part 1*. Cambridge University Press.
- 池田康夫、2012.『アリストテレス 生成と消滅について』京都大学学術出版会
- Joachim, H. H. 1926. *Aristotle on Coming-To-Be & Passing-Away (De Generatione et Corruptione)* . Clarendon Press.
- Kirk, G. S., Raven, J. E., Schofield, M. 1983. *The Presocratic Philosophers, A Critical History with a Selection of Texts* (2nd edition) . Cambridge University Press.
- Mathewson, R. 1958. 'Aristotle and Anaxagoras: An Examination of F. M. Cornford's Interpretation' . *The Classical Quarterly*, Vol. 8, No. 1/2. 67-81
- O' Brien, D. 1968. 'The Relation of Anaxagoras and Empedocles.' *The Journal of Hellenic Studies*, Vol. 88, 93-113.
- Reesor, M. E. 1963. 'The Problem of Anaxagoras.' *Classical Philology*, Vol. 58, No. 1, 29-33
- Ross, W. D. 1924. *Aristotle' s Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*. 2 vols. Clarendon Press.
- Taylor, A. E. 1928. *Commentary on Plato's Timaeus*. Clarendon Press.
- Williams, C. F. J. 1982. *Aristotle's De Generatione et Corruptione*. Clarendon

96

Press.

(まつうら かずや・講師)